

1. 研究主題

主体的に伝え合い、深い学びのある授業の創造
～ペア・グループ学習を位置付けた対話のある授業づくりを通して～

2. 主題設定の理由

「一人ひとりの学びを保証する」（どの子も参加できる授業）を根底に、「主体的に伝え合い、学び合う」授業づくりに取り組む。

昨年度は、「ペア・グループ学習を位置付けた対話のある授業づくり」をサブテーマに、国語科、算数科における「ペア・グループ学習を保証するための支援方法」「課題設定の工夫」について研究を進めてきた。一人1回以上の提案授業を公開し、事後研では授業の中の子どもたちの姿から学び、授業改善に取り組んできた。

<昨年度の子どもの姿から>

- ・自分の考えを友達に伝えようとする姿や図を指しながら説明する姿が見られた。(低学年)
- ・友達の考えを聞いて自分の考えが変わったり教え合ったりする姿が見られた。(低学年)
- ・ペアで話し合うことで自信がつき、全体交流の中でも普段発表しない子どもが手を挙げた。「先生、発表したい!」と考えを積極的に伝え合い、「ほ〜。」「あ〜。」と言ったつぶやきからも学び合いの姿が見られた。(低学年)
- ・友達の発言を聞き洩らすまいとする態度や順番に意見を言う姿、話し合いの時の声の大きさや体の向きなどの学習規律も定着している。(高学年)
- ・困っている友達へのアドバイスやフォローをし共感的に受け入れる子ども同士の関わり合いが見られた。(高学年)
- ・一人で考えている時には答えを間違えていた子どもも、ペア学習で自分の間違いに気づいたり相手に間違っている所を教えてもらったりし、考えの変化が見られた。(高学年)

このように、一部であるが私たちのめざす子どもの姿は見られたと言える。

ただし、これを以て深い学びの保証となるとは言えない。よく見ると、

- ・ペア学習で一言もしゃべらず黙ったままの子ども、互いの書いた考えを言い合って終わるペア、考えを持っているのに友達にうまく伝えられない子どもがいる。
- ・友達の考えを写すだけで自分の考えを持てなかった子どもがいる。「〇〇ちゃんは、こうなんだね。私の考えは〜。」と誰もが言い合えるペア・グループ学習までには至っていない。
- ・考えを伝え合うことはできても、その後がつながらず、子どもたちが「深め高め合った」という実感を共有できていない。

全員の学びを保証するにはどうしたらいいのか、「主体的」「対話的」な「かかわり合い」、「深い学び」をどう保証していくのか。子ども自身が自発的に説明したくなる場をどう生み出すか。学習課題についても「なぜ、どうしての課題」「絞り込んだ課題」についても追究しているところである。

学力調査の結果、学年間の学力差はあるものの、全体として、目標値達成率は上がってきている。

本年度も、めざす子ども像をしっかりと共有した上で、学年間や学級内の学力格差の縮小を念頭に、最低限共有化するところを探り、研究を推進していきたい。

昨年度の授業づくりを基盤に、問題解決的な学習の中にペア・グループ学習を位置付け、引き続き「グループ学習の推進」と「課題設定のあり方」を中心に研究を推進していく。子ども同士がかかわり合う素地として、コミュニケーション促進に向けた支援や平素からの人間関係づくりも必要となってくる。子どもたちが友達とかかわり合うことで自分自身の高まりを自覚できるような授業づくりの構築こそが学び合いのある授業へつながると考える。

3. 研究主題について

◆主題のめざす子どもの姿とは

「主体的に考えを伝え合い、かかわり合い、学び合おうとする姿」

根拠を明らかにした自分の考えを持ち、考えを「伝え合い」、友達の考えと比べて良いところを自分の考えに生かしながらクラス全体でより良い考えに高めていける姿（学び合いの姿）と捉える。

◆「主体的に伝え合う」姿とは

互いの立場や考えを尊重しながら、互いの思いや考えを相手に伝えようと努力し、話し言葉や書き言葉などの言語や動作化、具体物を使って豊かに表現したり友だちの考えを受けとめたりする姿と捉える。具体的には、次のように捉える。

- ・自分の考えの根拠を文章事実から説明する。
- ・自分の考えを式・図・数直線・具体物などを使って説明する。
- ・友だちの考えをイメージ化しながら聞く。
- ・友だちの考えを自分の言葉で置き換えながら、聞く。

◆「深い学びのある」授業とは

考えを出し合うだけの形式的な話し合いではなく、グループ学習を含む子ども同士の関わり合いの中で考えを伝え合い高め合っていく姿と捉える。

学び合いのある授業では、子どもたちが対話し、かかわり合う中で、次のような自分自身の高まりを感じた時であると捉える。

- ・既習の知識や支援から、自分の力で考え、友達に伝えることができたとき
- ・自分の考えが友だちに認められたとき
- ・友達の考えがわかり、新しい発見があったとき
- ・学習した新しい考え方（やり方）で問題が解けたとき
- ・自分の力の伸びを感じたとき

このような高まりを感じるためには、他者とかかわるための積極的態度や受動的態度、コミュニケーション力など、協働学習の素地である「集団づくり」も必要である。

◆「ペア・グループ学習を位置付けた対話のある授業」とは

ペア・グループ学習という小集団の学びを通して、子どもと子ども、子どもと教師の心の交流

が図られ、子どもたちが主体的に対話し聴き合うことで、深い学びを得ることのできる授業と捉える。ペア・グループ学習で話せる場所が保証され、「聴いて」「聴かせて」という対話のある姿が見られ、「対話する」ことで自分に問い、自分の考えを見直そうとする姿が見られる授業である。

また、ペア・グループで解決していく中で、互いの考えを認め合うことは、一人ひとりが大切にされているという実感を持ち、よりよい人間関係が築かれていくことにつながると捉えている。

4. 研究仮説について

こうしたことの実現のために、次の研究仮説をもとに研究を進めていく。

深い学びを支える課題設定の工夫とペア・グループ学習を中心とした対話のある授業づくりを創造すれば、子どもたちは主体的に伝え合い、学び合うことができるであろう

5. 研究内容について

<授業研究>

a ペア・グループ学習を保証するための具体的な支援方法（対話的な学びの保証）

- ・引き続き、授業の中に「ペア・グループ学習」を位置付ける。
- ・ブロック人権教育の視点を入れる。

b 課題設定と提示の工夫（主体的な学びの保証）

- ・「深い学びを支える課題」の追究（「なぜ、どうしての課題」「絞り込んだ課題」などの問題解決学習で）

※ a、bにおいては、授業UD（特別支援教育×教科の本質）やAL（主体的・対話的・深い）の視点とも重なる。

<授業を支える取り組み>

- c 家庭学習、チャレンジタイムの充実
- d 学習の決まり、学習規律の見直しと徹底
- e グループでの取り組みの日常化（生活班と授業グループのリンク、班活動等）

a 「ペア・グループ学習の推進」については、
本校では、ペア・グループ学習を以下のように捉えている。

- ◎各教科のねらいである学習指導要領に示す目標や内容を実現するための場
- ◎子どもたちが人とかかわり合う力（コミュニケーション力）をつける場
- ◎より多くの人が自分の仲間であることを学ぶ（仲間づくり）の場

「対話的学び」とは

- ◎相手を意識すること（話したい、伝えたい、納得させたい、聞きたい）
- ◎「学び合い」の良さを子どもたちが理解している。形より先に実感が伴っている。

※グループ学習が目的ではなく、指導内容（ねらい）のまとめに行きつくための場と捉える。

※何のために話し合うのか、話し合っ何を決めるのか子どもが理解していることが前提。

グループ学習の入り方は様々だが、「何をするための活動か」は明確にしておく必要がある。

- ・全体交流前、課題に対する自分の考えを持たせるためにグループ学習を入れる。
- ・全体交流後、課題に対する自分の考えを見直したり、はっきりとさせたりするためにグループ学習を入れる。
- ・基礎基本の定着（教え合い）のためにグループ学習を入れる。
- ・的確に説明できるか等を聴き合うためにグループ学習を入れる。 等々

活動の目的をはっきりと提示してグループに活動の見通しを持たせることが大切。

※どのグループの誰を見取って支援していくのか計画を立てておく。

※ペア・グループ学習が成立する基盤として、平素からの学習規律や学習スキル、1時間の授業の積み上げ、仲間づくりが大事である。

※グループ学習を入れる目的やグループ学習の良さについて教職員で共通理解し、ペア・グループ学習の仕方と意義（なぜ、ペア・グループ学習なのか、その意味や良さ）を常に授業で伝えていく。

ペア・グループ学習を入れる目的とは

◆教師の教育的意図から

- ①学習内容の理解や深まり、考えを高める。
- ②自主性や協調性、仲間づくり、コミュニケーション能力を高める。
- ③能動的な授業参加を促し、授業に参加しない「お客さん」を生み出しにくい。

ペア・グループ学習の良さとは

◆教師の教育的意図から

- ①多様な考えと出合え、考えが広がるという学習効果がある。
- ②コミュニケーションの保証ができる。（子ども同士で言葉を交わす時間、意図的な人とかかわる時間の保証）

◆子どもの立場から

- ③自分の考えを話しやすい。主体的に安心して学習できる。自分の出番がある。（ペア・グループなら自分の困りを言える。迷う・尋ねる。⇔わかる。）

コミュニケーション促進に向けた支援の工夫

◆まず、話を「聴く」ことのできる子に育てる。

★低学年～	レベル1	相手の話を最後まで聴ける
	レベル2	良い姿勢で相手の話を聴ける
	レベル3	相手の目を見て話を聴ける
★中学年～	レベル4	相手の言っていることを心の中で復唱しながら聴ける
	レベル5	うなずいたり相づちをうったりしながら聴ける
	レベル6	相手の言っていることを理解し、自分の中で整理しながら聴ける
★高学年～	レベル7	相手の言っていることの要点をまとめながら聴ける
	レベル8	相手の言いたいことを想像しながら聴ける
	レベル9	相手の言いたいことを相手の気持ちになって聴ける
	レベル10	相手の感じ方。考え方と自分の意見とを比較しながら聴ける

◆普段からの人間関係づくり

- ・子どもたちが安心して発言できるように、友達の発言を最後までしっかりと聴き合う学級づくりをしていく。
- ・そのためには、まず教師が子どもの意見をしっかりと「聴く」。また、普段からわからないことを「わからない。」と言え、わからないことを友達に尋ねる（自ら学ぼうとする）姿が見られるような学級づくりをしていく。

◆円滑なコミュニケーションの進行（話型指導）

- ・かかわる言葉を教える。各教室に掲示してある話型を参考にし、次の学年へと積み上げていく。「～さんと同じで・・・」「～さんと似ていて・・・」「～さんと違って・・・」の3つの話型を意識させ、友達の考えと自分の考えを比べながら最後までしっかりと聴けるようにしていく。（司会を決め、話し合いをパターン化していてもよい）
- ・高学年は、話型指導にとらわれ過ぎず、「友達の考えと自分の考えのつながりや差異を考えながら聴く」指導もしていく。
- ・そのため、グループで考えを無理にまとめることはしない。リーダーも作らない。（課題解決場面は一斉学習で）

◆学習形態の工夫

- ・教科や学習内容、子どもの実態から判断して工夫する。基本としては、1，2年生はペア。3年生以上は男女混合4人の小グループとする。
- ・相互指名しながら考えや意見を伝え合う。友達の意見と自分の意見を照らし合わせながら聴く。さらに聴きたいこと、分からないことは質問するなど。司会者を設けるかどうかは学級実態に応じて考える。

◆日常的なペア・グループ学習を心がける

- ・授業だけでなく、日常の場面で対話（話し合いの基本）を重視し、日頃からペア・グループ形態での話し合いや活動を取り入れていく。（積み重ねが大事）

本校のペア、グループ学習のルール

- ① 必ず全員の考えを聴く。
- ② 疑問に思ったことや、もっと聴いてみたいことは質問する。
- ③ 無理に考えはまとめない、一人ひとりの考えを大事にする。

◎本年度は、上記の内容を維持推進しながら、

○主体的、対話的な学びが実現できるように、ペア・グループ学習の具体的支援の工夫について追究していく。

例えば、「学び合い」の使い分けをしてみる。

A：フリートーク（形式にとらわれず自由に）

B：自分の考えを書く→ペア・グループ学習で話し合い（話型に沿って）

C：ポスターセッションなど学習形態を工夫してみる。（椅子・机を使わず、立ったままのペア・グループ学習など）

・相手に伝えるスキルの獲得（声の大きさやトーン、語彙・身振り・指し示し、図表、絵、ホワイトボードの活用）や思考過程（比較する・理由づける・関連づける・分類する・推測するなど）に合った思考ツールや使用したい言葉を獲得させる。

・上級生の学び合い見学、ノート紹介で学習規律を確立する。

・ペア・グループ学習の具体的な進め方（ルールや支援方法）の共有化。等

b 「課題設定の工夫」については、

◆ 「めあて」「課題」「深める問い」の捉え

「めあて」～子どもの側から見た今日の学習内容の方向性と捉える。（～しよう。～を考えよう。まとめよう。調べよう）

「めあて」に対して「振り返り」を位置付ける。

「めあて」と「課題」の中身が同じときは、課題を出さなくてもよい。

「課題」～教師の側から見たこの時間につける力、ねらいに向けて考えさせることを「課題」と捉える。（「なぜ、どうしての課題」「絞り込んだ課題」）

「課題」に対しては「まとめ」を位置付け、整合性を持たせる。

「深める問い」～子どもが課題を解決する過程で生まれてきた矛盾点・対立する点・疑問などから、ねらいに向けてさらに深めさせる問いとする。

ただし、

柔軟的に位置付け、子どもの主体性を育てていくことが大切。

- ・「めあて」と「課題」の順序にこだわる必要も、必ずしも両方設定する必要もない。
- ・「課題」を設定した場合は、答えを明確にする必要があるので、「まとめ」が必要。
ただし、多様な見方や感じ方を求めるような授業の場合は、「まとめ」よりも「振り返り」を充実させる方が適切な場合がある。
- ・「振り返り」は本時の学びを振り返らせ、自覚するものなので、基本的には全ての授業で設定する。その際、教師が視点を与える。（「めあて」の達成状況についての自己評価や「今日頑張ったこと（次に頑張りたいこと）」「今日新しく気付いたこと」等）

型にこだわるのではなく、教科の特性や単元の展開、本時のねらいに応じて適切に設定する。

子どもの思考の流れに沿った展開を考える。

- ・例えば、「めあて」→「課題」→「展開」→「まとめ」→「振り返り」の流れ
「めあて」→「展開」→「振り返り」の流れ、
「課題」→「めあて」（「課題」へのアプローチの仕方を「めあて」として設定する）場合もある。等々、内容や設定のタイミングは変わってくる。

◎本年度は、上記の捉えを根底に、

- 子どもたちが主体的に取り組み「考えてみたい」「考えたことを伝えたい」と思える課題の設定の工夫を追究していく。
- 子どもたちが必要感を持って学習課題を引き受け、課題を共有するためには、どんな工夫ができるのか。

c 「家庭学習・チャレンジタイム」、d 「学習の決まり・学習規律」、e 「グループ活動の日常化」については、職員で見直し、共通理解ができている。

<学習規律>

1. チャイムで始められるように学習の準備をしよう。
2. 授業の始まりと終わりのあいさつ、返事をきちんとしよう。
3. 良い姿勢で学習をしよう。
4. 発表の仕方のきまりを守ろう。
5. 話を聞くときは、話す人の方を見て聴こう。
6. 授業中は、集中して頑張ろう。

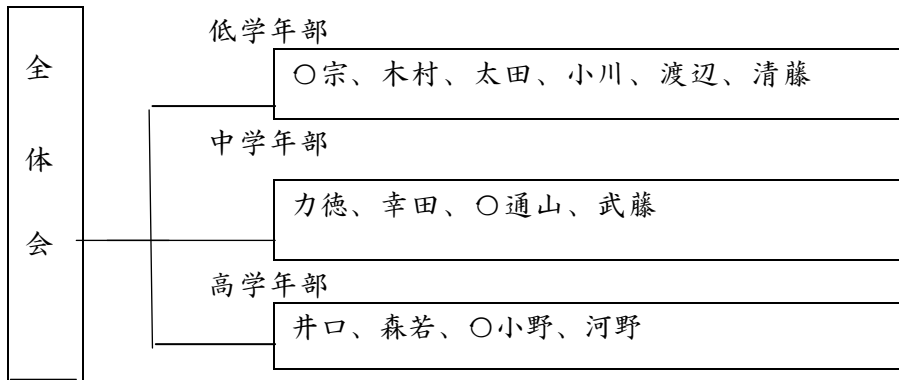
※弱点項目や良くなったところなどの分析と考察を学年部で情報交換していく。

6. 研究組織

(1) 研究推進委員会

校長	教頭	低学年部 (研究)	中学年部 (教務)	高学年部
橋本	豊永	宗	通山	小野

(2) 全体会と学年部会



7. 研究計画

☆全体授業研 (第1回: 1学期、第2回: 2学期、指導主事招聘)

☆学年部授業研 (全体授業研を行わないクラスが実施。2学期までをめぐりに学年部で見合い、事前事後研も行う。他学年部も進んで参加し、授業者に「授業観察シート」で伝える)

☆授業改善研修 (学年部で板書写真を持ち寄り研修)

☆ブロック人権レポート (1本)

☆研究のまとめ (全体研究授業提案については、研究担当がまとめる。各時「提案授業の振り返り」をまとめる。板書の写真、ワークシートやノート、思考ツール等)

※一人1本以上提案授業をし、研究主題、研究仮説にそった授業仮説をたてて検証していく。

※個人研として、他の先生方の授業 (朝の会や帰りの会、教室環境なども可) を積極的に見に行く。(事前に申し出て、日程調整する。)

※他校の授業や先進校の研修会にも計画を立てて参加し、還元していく。

月	研究・実践	月	研究・実践
4	基本構想づくり ・研究主題・研究仮説 ・研究組織・研究年間計画 学級実態の分析、学年・学級実践 ・気になる子の情報交換 第1回全体研指導案作成	10	学年部研究授業、部落差別解消推進法研修、色覚研修、ブロック人権公開授業指導案審議
5		11	第2回全体研究会、学年部研究授業・指導案作成、事後研究会 ブロック人権公開授業研究会
6	第1回全体研究会、学年部研究授業 ・指導案審議、事後研究会 先進校公開研視察	12	提案授業分析と考察、学年部研究授業 個人授業研
7	提案授業分析と考察、1学期のまとめ 学年部研究授業	1	標準学力調査 ・アンケート調査 学年部研究授業
8	研究内容の検討、2学期の研究計画 市人研実践交流会 校内研究に向けての教材研究 UD研修	2	先進校公開研視察 学力調査の分析、考察 各学年の研究のまとめ
9	学年部研究授業、個人授業研	3	研究のまとめ、来年度研究の方向性